

図書館展示7月●2004

Bill Evans(1929-1980)

ビル・エヴァンスを入り口に
**ジャズ・ピアノを
楽しもう!**

企画 ♪ 高田涼子 (国立音楽大学附属図書館閲覧参考部)

期間●7月7日-8月4日

場所●図書館ブラウジングルーム/AV資料室



ビル・エヴァンスが演奏している姿

ビル・エヴァンスを入りに、 ジャズ・ピアノを楽しもう!

はじめに

私がビル・エヴァンスを意識して聴いたのは、2年前の春でした。幼い頃から、ジャンルにとらわれず時代もこだわらず様々な音楽に触れてきました。それでも、クラシックを中心に国立音大でピアノを学んでいた私には、いわゆるジャズは少し理解しがたい存在でした。《A 列車でいこう》《テイク・ファイブ》《イン・ザ・ムード》《エンターティナー》など、有名で子供心にも楽しめるような曲は好きで演奏したりしていました。しかし、長くて複雑でメロディーを口ずさむのが難しいような演奏は、なかなかなじめませんでした。

大学の図書館には意外にもジャズの資料が所蔵されていました。ジャズのスタンダード曲や、クラシックやディズニーなどの曲がアレンジされているたくさんの楽譜やCDに出合えました。何より、ビル・エヴァンスのアルバム『ワルツ・フォー・デビー』を聴いて、ジャズの見方が変わりました。少しずつですが、身体にすっと入ってくるようになったのです。

今回の企画は、ジャズに触れてみたいけどきっかけがなかった人に、ジャズの世界（特にピアノ）に入りやすいものを紹介したいと思います。私自身の知識が浅く、また好みが偏っている点もありますが、少しでもジャズに興味を持っていただければと思います。

Contents

- ・ビル・エヴァンスについて……………2-5
- ・ジャズの歴史……………6-8
- ・ジャズ・ピアニストの紹介……………9-12
- ・ジャズ・ピアノ資料の紹介……………13-17
- ・クラシックとジャズの作曲家の年表(付録)

企画：高田涼子

ビル・エヴァンス

Bill Evans 1929-1980



1929年8月16日、ニュージャージー州ブレインフィールドに生まれる。6歳でピアノ、7歳でフルート、8歳でヴァイオリンを習う。13歳の時に兄ハリーの代わりにバンドに参加し、閃きでブルース・コードをはさんで演奏したことからジャズ世界に入る。サウスイースタン・ルイジアナ・カレッジでピアノと音楽教育の学士号を得て、マナーズ音楽大学にて作曲を学ぶ。マイルス・デイビスのグループに籍を置くが半年で脱退し、自らのトリオで新しいサウンドを追求し続ける。1980年9月15日、出血性潰瘍、気管支炎、肝硬変で死去。享年51歳。

5ページ目に Biography あり。

ビル・エヴァンスってどんな人？

- ・鼻歌のように気軽でなく、目的をもって試行錯誤し続けたので、演奏難易度は高い。ストイックな芸術肌だった。
- ・音楽家としては人々にたくさん影響を与えたが、人間としては謎の人で、世間の詮索には応えない人だった。
- ・ビルの好み：たばこは「キャメル」、飲み物はコカ・コーラ、肉の焼き加減はウェルダン。
- ・演奏するときの姿勢は、グレン・グールドがパッサカリアを弾くときと似ている。
- ・共演者とは、密に長く深く交わり、サイドメンを滅多に替えなかった。
- ・流行歌が敬遠され取り上げられなかったポピュラー曲などを、レパトリーにしていた。自作曲は2割程度で、あとはポップでシンプルな曲が好み。
- ・ビル・エヴァンスの日本初来日は、1973年。麻薬常習犯としてブラックリストに載っていたため。
- ・死因は肝炎を放置しておいた為。身体中のあちこちに水腫ができ、左手は膨れ上がり鍵盤を押さえられるのが不思議なほどだった。

ビル・エヴァンスの音楽は、朝の目覚めた時、夜寝る時、疲れた時や落ち込んだときなど、いつでも聴ける音楽だと思います。シンプルで繊細、そして複雑に絡み合うハーモニーでありながら、どこか軽い。クラシックはハーモニーが重要で発展しましたが、ジャズはリズムが重視でした。ビル独自のサウンドは、ビバップのリズム構造を変えずに、フランス近代音楽のような根音のない和音を使って、色彩感豊かなハーモニーのジャズです。

- ・音楽家であり、思想家でもある彼の言葉を抜粋してみました。

ビル・エヴァンスの言葉

「芸術一般に関する私の信条は、それが魂を豊かにするものでなければならないということだ。自分自身の一部を再発見することはやさしい。だが、芸術を通して、人間は自分でもその存在すら知らなかった自分自身の一部を教えられるのだ。それこそ、芸術の真の使命というものだ。芸術家というものは、自分自身の中に普遍的な何かを見出さねばならないし、また、それを自分以外の人々にも通用する言葉に置き換えることのできる人間を言う。そして不思議なことに、芸術はこのことを人に、その人が気づかないうちに伝えることができるのである。豊かにすること、それこそ音楽の職務だ。」

「修練と自由は極めて繊細な形で混じり合わなければならない…。音楽はすべてロマンチックだと僕は信じるが、感傷的になりすぎるとは、ロマンチズムもわずらわしい。その一方で、修練をもって処理されたロマンチズムは、最も美しい類の美だ。」

- 自分のよくわかっていないものを演奏するよりも、シンプルな演奏をすることを好んだ。
私がいなくてはいけないことは、音楽を大切にすることだけだ。
脳天に届く衝撃を好み、十分衝撃を受けてようやく何かを感じる人々もいる。
でもなかには内面に入って、何か、もしかしたら豊かさなどを探したい人々もいる。
- 苦勞して形になったものを僕は信用する。
- ジャズを知性的な法則で分析しようとする試みにはうんざりさせられる。
そうではないんだ。感覚なんだ。
- 私はすべての人に「全世界共通の音楽的な心」と呼べるものがあると信じています。
- 多くのクラブはハウス・ピアノよりもゴミ箱に注意を払うものだ。

2歳年上の兄ハリーの代わりに12歳でダンス・バンドのピアニストを務めていた時に、
「何となく閃いてブルース・コードをちょこっとはさんでみた。誰も考えつかなかった何かを音楽でやるって発想自体が、自分に全く新しい世界を拓いてくれたんだ」

マイリス・デイビス・グループを脱退した後、独自のサウンドを追及していたビル・エヴァンスは、ある天才ベーシストに出会った。彼こそが探していたサウンドを理解し共にプレイできる人だ！こうしてスコット・ラファロ(b)とポール・モチアン(ds)のレギュラー・トリオが結成された。ビル・エヴァンスに音楽スタイルや精神面に大きな影響を与えたラファロを紹介しよう。

スコット・ラファロ (1936-1961)

17歳で初めてベースに触れ、イサカ音楽院で学んだあとバンドで演奏するようになる。1959年にはベニー・グッドマン楽団に参加するが、「ダウンビート」誌の新人部門第1位に選ばれ、秋にはビル・エヴァンス・トリオに参加。23歳。今までは、ドラムと同様にリズムを刻むだけのベースだったが、ラファロは、ピアノ/ベース/ドラムがそれぞれソロを演奏して、お互いに触発しあう「インタープレイ」と表現される演奏スタイルをして、ビル・エヴァンスに大きな影響をもたらす。



「スコットは、僕の次の考えが読める信じられないような奴だった。」 ビル・エヴァンス
「僕たちが演奏に自由を発見したのは、スコットがいたからだ。彼のおかげで、やりたいことはいつもやれるという楽しさと希望があった。」 ポール・モチアン(ds)

ビル・エヴァンスはトリオに対する抱負をこう語っている。

「自分の出す音は、願わくばトリオから出すものは、唄わせたいんだ。自分がこの耳で聴きたいと思うものを弾きたい。唄うというあの素晴らしい感覚だけは絶対になくってはならない。」

このレギュラー・トリオは、まさに、ビル自身が「唄わせたい」と言っているような演奏だった。同トリオは、ラファロが自動車事故により25歳で死去したため、わずか1年半だけ活動し、アルバムは4枚しか残っていない。ラファロの死後、ビル・エヴァンスは数ヶ月間、ピアノを弾くことができませんでした。それほどビル・エヴァンスの音楽にとって大きな存在だったのです。

「それがどんなに自分を打ちのめしたか、自分でも咄嗟には気づかなかった。」

「音楽的に、何もかもが止まってしまったようだった。家でもピアノに触ろうとすらしなかった。」

作品

Bill Evans Doremi Music, 2000. <G28-231>

9枚のアルバムの愛奏曲の中から15曲を選んで採譜されているが、残念ながらアドリブの一部は省略されている。掲載楽譜は(Waltz for Debby)や(My foolish heart)、(ダニーボーイ)など。

定本ビル・エヴァンス / ジャズ批評編集部編 松坂, 2003. (ジャズ批評ボックス) <J99-383>

ビル・エヴァンスに熱い想いを抱いている人たちの様々な記事が掲載されている。季刊ジャズ批評別冊「ビル・エヴァンス」(1991年発行、絶版) <P765B 1991(2)>に掲載された記事を再構成したものである。年表、ディスコグラフィーが充実している。

Bill Evans / Peter Pettinger Yale University Press, c1998. <J91-431>

筆者はイギリス人でクラシック・ピアニスト。エヴァンスの大ファン

ビル・エヴァンス / ピーター・ペッティンガー著 水声社, 1999. <C64-460>

上記「Bill Evans」の翻訳本。Partが4つに分かれていて、.Birth of the Sound .The first trio,1958-61 On the Road,1961--77 The Last Trio,1977-80で構成されている。少し写真が追加されている。

ビル・エヴァンス / 日本たばこ産業株式会社アド企画室編 講談社, 1989. <C48-399>

ジャズ喫茶の店主他、ジャズ好きな人達の対話や記事が掲載されている。巻末にディスコグラフィーと年表あり。共演者索引、演奏曲索引も付いている。

ビル・エヴァンス 河出書房新社, 2001. (Kawade 夢ムック. 文藝別冊) <C65-552>

Bill Evans Trio. I & II / ビル・エヴァンス(Vintage jazz collection : Jazz 625)<VE686>

1965年3月19日イギリスのBBCテレビの番組「Jazz625」のシリーズの1つとして作成された。同資料がLDにもある。 VD3616 VD3624

The Universal Music of Bill Evans / ビル・エヴァンス

The creative process and self-teaching (Vintage jazz collection : Jazz 625)

兄ハリーとの対話、即興演奏もあり。 VD1817

A Tribute to Bill Evans / ゴードン・ベック(p) VD1286

ビル・エヴァンスの愛奏曲を演奏している。

レギュラー・トリオでの演奏

Waltz for Debby / Bill Evans Trio <XD16575>

(My foolish heart)でフォークの音が聞こえます。耳を澄ましてじっくり聴いてみてください。

Explorations / Bill Evans Trio <XD21277>

ソロの演奏

Alone / ビル・エヴァンス <XD21274>

ハーモニカ奏者トゥーツ・シールマンズとの演奏

アフィニティ / ビル・エヴァンス <XD49022>

マイルス・デイビス・グループにいた時の演奏

Kind of blue / マイルス・デイビス, ジョン・コルトレーン <XD14209>

ギタリスト:ジム・ホールとの演奏

Undercurrent / Bill Evans & Jim Hall <XD16610>

*ラファロの死後にビル・エヴァンスが立ち直れたのは、彼の存在が大きかった。

「1966年にパークリー音楽院に行ったんだけど、そのシステムで最初に習うサウンドをピアノでやるとエヴァンスになる。」 By.佐藤允彦

Bill Evans Biography

(1929-1980)

| 西暦年 | 年齢 | | 西暦年 | 年齢 | |
|---------|----|--|--------------|----|---|
| 1929 | | ニュージャージー州に生まれる | 1966 | 36 | 父ハリー・L・エヴァンス死亡 |
| 1935 | 6 | ピアノを習い始める | | | 初のホール・コンサート |
| 1936 | 7 | ヴァイオリンを習い始める | 春 | | ゴメス(b)、アーノルド・ワイズ(ds)で ヴィレッジ・ヴァンガード出演 |
| 1941 | | フルート・ピッコロを習う | 初秋 | 37 | 教育ビデオ「ユニバーサル・マインド・オブ・ ビル・エヴァンス」制作 |
| 1942 | 12 | 兄の代わりにバンドに参加 | 1968.6月 | | 第2回モントルー・ジャズフェスティバル出演 |
| 1946 | 17 | 奨学金を得てサウスイースタン・ルイジアナ・カレッジ に入学 | 9月 | 38 | 初完全ソロ・アルバム「アローン」録音。グラミー賞獲得 |
| 1950 | 19 | ピアノと音楽教育の学士号を得て同大学を卒業 | 1969. 10月 | 40 | 「フロム・レフト・トゥ・ライト」で初めてエレクトリック・ピアノ を弾く |
| 1951 | 21 | 兵役につく(朝鮮戦争) | 1971 | 41 | 全曲オリジナル「ザ・ビル・エヴァンス・アルバム」を レギュラー・トリオで録音。グラミー賞獲得 |
| 1954 | 24 | 除隊 | 1973.1月 | 43 | 初来日！最終日「ライブ・イン・トーキョー」録音 |
| | | 3歳の姪デビーに「ワルツ・フォー・デビー」を作曲 | 春 | | 12年連れ添ったエレインが自殺 |
| 1955 | 25 | ジェリー・ウォルド楽団で初録音 | 8月 | | ネネット・ザザラと結婚 |
| | | NY83丁目に住む | 1974.3月 | 44 | 2度目の来日 |
| | | マナーズ音楽大学で作曲を学ぶ | 1975.9月 | 46 | 長男エヴァン誕生 |
| 1956 | 26 | 初リーダー作「ニュー・ジャズ・コンセプト」の録音 | 1976 | | ゴメス(b) & ジグムンド(ds)で3度目の来日 |
| 1957 | 27 | 「オール・アバウト・ロージー」で伝説的ソロ | 1977 | 48 | 「ユー・マスト・ビリーブ・イン・スプリング」録音。 ゴメス脱退 |
| 1958.4月 | 28 | マイルス・デイビス・グループに加入 | 1978.9月 | 49 | ジョンソン(b)、ジョーンズ(ds)で4度目の来日 |
| 11月 | 29 | マイルス・グループ脱退 | 1979.1月 | | ジョー・ラバーベラ(ds)加入。ラスト・トリオ誕生 |
| | | 1958年度ダウンビート誌国際評論家投票新人賞 受賞 | 4月 | | 兄ハリー・エヴァンス自殺 |
| 1959 | 30 | スコット・ラファロ(b) & ボール・モチアン(ds)と 「ポートレイト・イン・ジャズ」を録音 | 8月 | | ラスト・スタジオ録音「ウィー・ウェイル・ミート・アゲイン」を 兄に捧ぐ |
| 1961.2月 | 31 | 「エクスプロレーションズ」録音 | 秋 | 50 | 欧州ツアー |
| 6月 | | ヴィレッジ・ヴァンガードに出演 | 1980.6月 | | ヴィレッジ・ヴァンガード出演をワーナーが録音 |
| 7月 | | スコット・ラファロ自動車事故死 | 8月 | 51 | ラスト・レコーディング |
| | 32 | ～スランプ～ | 9/11 | | 演奏不可能となる |
| 1962.4月 | | オリン・キーブニューズにレコーディングさせられるが 4曲でダウン | 9/15 | | 死去。死因は、出血性潰瘍、気管支肺炎、肝硬変 |
| | | ジム・ホール(g)と「アンダー・カレント」録音 | 9/19 | | セント・ピータース教会で葬儀 |
| 5月 | | チャック・イスラエルズ(b)加入 | | | |
| 1963 | 33 | リヴァーサイドへの契約消化のため、ピアノ・ソロを録音 | | | |
| | | 多重録音ソロ・アルバム録音 | | | |
| 1964 | 34 | スタン・ゲッツ(ts)、エルヴィン・ジョーンズ(ds)らと レコーディング | | | |
| 1965 | 35 | BBC番組「ジャズ625」収録 | | | |



ジャズ・ピアノの歴史

ジャズにおけるピアノの発展は、他の楽器とは異なります。ジャズの歴史 = ラップと言われますが、街頭での演奏を主としたブラスバンドではピアノが使われることがなかった為、独自の発展をしてきました。ジャズのスタイルが変わる時期は、戦争であったり、世界恐慌であったりと色々な背景があります。

ラグタイムという言葉はなじみが少ないかもしれませんが、曲を聴けば感じがつかめると思います。最近放送されているテレビ番組で「いきなり！黄金伝説～芸能人1ヶ月1万円生活」というのがありますが、その中で料理を作るときに流れている曲の1つがラグタイムです。元々は、あるドラマのサントラとして使われていたそうですが…。ラグタイムで有名な作曲家スコット・ジョプリンの〈エンターティナー〉は、映画「スティング」で使われて有名になりましたが、遊園地などでもよく軽快に流れています。某自動車メーカーの軽自動車 Lapin の CM では〈Pine Apple Rag〉が使用されています。

1900年代 ラグタイム Ragtime

ジャズ・ピアノのルーツと言われるラグタイムは、長い年月を経て、西洋音楽と黒人音楽が融合されて19世紀末に完成されました。黒人たちの歌がキリスト教と結びついてスピリチュアルズ(黒人霊歌)が生まれたように、1863年の奴隷解放宣言以来、職業選択の自由を得て音楽家になった黒人は、アメリカ南部の故郷から太鼓のリズムや狩猟の歌などを持ちこんだのです。奴隷の息子であったスコット・ジョプリンもラグタイムの確立に大きく貢献をした一人です。ラグタイムのスタイルは、19世紀ヨーロッパのロマン派のピアノ曲やブラスバンドのマーチの拍子、ケークウォーク(ドビュッシーの〈子供の領分〉で有名な舞曲)等の独特のシンコーペーションなど、様々な要素が混じり合って形成されていきました。当時の強拍弱拍とは常識はずれだったため、ラグ(ぼろ)タイムと呼ばれたそうです。初期のラグタイムは、譜面通りに演奏されていたのでクラシックに近いものでしたが、徐々にフィーリングと即興性を加えたジャズ的なものに変化していきました。

1910年代 ニューオーリンズ・ジャズ New Orleans Jazz

スペインとフランスが交互に統治していたルイジアナ地方の玄関口にあたる港町ニューオーリンズでは、あらゆる文化が混在していました。街の至る所に売春宿があり、黒人ピアニストが客引きのために演奏していたのがジャズです。ジェリー・ロール・モートンは、その区域で「先生」(Professor)と尊敬されていたそうです。彼は、ブルースを取り入れ演奏し、後に「これがジャズの始まり」と言っています。なんと「ジャズの創始者」と自ら名刺に書き、1902年には「自分がジャズを発明した」と公言しました！が、実は彼より前にもジャズらしい演奏をしている人はいましたし、他人の曲もあくまで自分のコピーだと言い張ったりしていました。その結果、偉大な作曲家・ピアニストであるにもかかわらず、仲間や評論家から反感を買い、ホラ吹き扱いされてしまいました。

ジャズの語源

ジャズを生み出したのは黒人たちでしたが、魅力のある音楽だと知った白人たちは真似を始めました。1951年頃、白人がバンド名に「ジャズ」を使ったのが最初です。ジャズの語源には様々な説があります。ジャズパーというプレイヤーの名が縮まってジャズになった説、フランス語の“jaser”（うわさ話をする）から来ている説、シカゴの酔っ払い客が“Jass it up”「一発やれ！」とバンドをあおって叫んだ説などなどです。



1910,20年代 ストライド/ブギウギ Strid/Boogie-woogie

クラシックの教養があったジェームス・P・ジョンソンは、ラグ的な奏法に複雑な和音を加え、単調だった左手の動きに変化をつけ、付点音符を使うことでスイング感を与え、力強く演奏しました。この奏法は、左手の動きからストライドと呼ばれました。彼のスタイルは、直々の愛弟子ファッツ・ウォーラーをはじめ、デューク・エリントン、アート・テイタム、更にはセロニアス・モンクにまで影響を及ぼしました。ファッツ・ウォーラーは、ジュリアード音楽院で高い音楽的素養とテクニックを身につけ、クラシックの高度な技巧をストライドに取り入れて4ビートの乗りを確立し、プライドを持って演奏しました。彼がニューヨークで活躍していた頃、シカゴでは、R&Bと合体し50年代のロックの要素となったブギウギが発生していました。このブギウギは、日本でも昭和の初め頃にブームになりました。ピアニスト/作曲家で有名な服部克久の父、服部良一は、日常会話を漫才のような言葉遊びに仕上げた日本オリジナルのブギウギを生み出しました。美空ひばりもジャズに憧れて(東京ブギウギ)を歌っているのは有名です。

日本にジャズが渡来したのは…

1919年、ミュージシャン井田一郎がアメリカ映画の伴奏のために海を渡り、帰国後にジャズバンドを結成したのが最初です。1927年12月、NHK「私の青空」で初めてジャズ・ソングが流れ、翌年には、レコードが発売されて徐々に広まっていきました。戦争中に敵性音楽が禁止されていた反動もあり、一気にジャズ・ブームが巻き起こりました。ただ、昭和20年代の約10年間は、スイング、ディキシー、ビバップ、ダンス音楽、アメリカーン・ポピュラー音楽がごちゃまぜで、ジャズとポピュラーの境目は感じられません。



1930年代 スイング・ジャズ Swing Jazz

一言で表すと、踊りだしたくなるようなサウンドです。ルイ・アームストロングらにより始められた即興プレイ。白人クラリネット奏者のベニー・グッドマンが1938年にクラシック音楽の殿堂カーネギー・ホールに出演し、スイング・ブームは頂点に達しました。スイング時代には多くの名ビッグ・バンドやコンボが誕生し、デューク・エリントン、ベニー・グッドマン、カウントベイシー楽団、グレン・ミラー楽団などが、それぞれの個性を競い合いました。今までのジャズ・スタイルは一人でメロディー、ハーモニー、リズムを演奏していたため、左手は規則的なリズムを刻んでいましたが、アール・ハインズはクラリネット的な長いシングル・トーンによるフレーズを生み出し、一躍ピアノをバンドの花形楽器にするという革命をもたらし、スイング・スタイルを作り上げました。スイング・ジャズの全盛期には、テディ・ウィルソンやアート・テイタムが活躍しました。彼らの演奏は、ブルース感覚が薄く、テクニックは抜群に優れていて、当時の黒人では珍しいピアニストです。

1940年代 ビバップ Be-Bop

1940年代のはじめ、ビッグ・バンドでのプレイに飽き足らなくなったデューク・エリントン、バド・パウエルなどの若いミュージシャンたちが、より即興演奏を求め、アイデアを交換し合っただけなので、(観客はそう呼んでいませんでした)曖昧な使われ方がされていますが、簡単に説明するとしたら、フレーズがより長くなり、半音が多用されているために調性が明確にならない、抽象的なサウンドです。雰囲気のカッコ良さや、知的さなどが感じられるため、クール・ジャズと表現していました。ビバップの野性的な演奏に対し、クール・ジャズは知的で内省的な響きをもっていて、白人ミュージシャンを中心にごく自然な形で生み出されてきました。ビバップが動であるとするならば、クール・ジャズは静であり、落ち着いた感じで極めてバランスのとれた、透明感あふれる美しい音楽です。

1940,50年代 クール・ジャズ Cool Jazz

クールとは特定の演奏スタイルではなく、演奏者がそれぞれ色々な意味で勝手に呼んでいただけなので、(観客はそう呼んでいませんでした)曖昧な使われ方がされていますが、簡単に説明するとしたら、フレーズがより長くなり、半音が多用されているために調性が明確にならない、抽象的なサウンドです。雰囲気のカッコ良さや、知的さなどが感じられるため、クール・ジャズと表現していました。ビバップの野性的な演奏に対し、クール・ジャズは知的で内省的な響きをもっていて、白人ミュージシャンを中心にごく自然な形で生み出されてきました。ビバップが動であるとするならば、クール・ジャズは静であり、落ち着いた感じで極めてバランスのとれた、透明感あふれる美しい音楽です。

1960年代 フリー・ジャズ Free Jazz

今までの調性という考え方をせず、より自由で個性的な即興プレイの可能性を追求したのが、フリー・ジャズです。これまでの人種問題に対する怒りや、ベトナム戦争の激化などによる社会的な反発が過激になってきた時代です。ジャズ・スタイルも追いかけるように無調性で自己主張をしました。型破りなスタイルなので、理解しにくい感もあります。少々クラシックの現代音楽と共通しているかもしれません。

1970年代 フュージョン Fusion

当初はクロスオーバーとも呼ばれていました。R & B ~ ファンク、ロックなどの音楽から大きな影響を受けています。新しい感覚を自分の表現にしようとした、好奇心豊かなチック・コリア、ハービー・ハンコックなどのプレイヤーたちは、エレクトロニックなサウンドを多用し、ポピュラーのメロディーを使い、あらゆるものを融合し、求め続けました。それゆえフュージョンはアレンジャーも重要な役割を果たします。

